



TITLE:

<批評・紹介>Paul Pelliot, Notes on Marco Polo I, Imprimerie Nationale

AUTHOR(S):

萩原, 淳平

---

CITATION:

萩原, 淳平. <批評・紹介>Paul Pelliot, Notes on Marco Polo I, Imprimerie Nationale. 東洋史研究 1961, 20(2): 98-100

ISSUE DATE:

1961-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/148210>

RIGHT:

取上られていることをあらためて感じる。アヘン戦争前の状態も、これにつづく外國勢力の侵透の影響も、太平天國亂以後の官人による産業化の試みも、その總社會的な効果も、考察されている。考察は勿論著しい、代表的な一面について行われるわけであるが、しかもそのような點描は全貌を「理解」せしめるのに十分な、要點についてなされている。さらに一步を進めてそのような諸側面を一つの歴史畫像に連結し、これをより鮮明なものに要約することも、勿論精勵な著者によつて遠からず實現せられるであらうことを期待してこの稿を終る。

(村松祐次)

Paul Pelliot, Notes on Marco Polo I,  
Imprimerie Nationale  
Librairie Adrien-Maisonneuve, Paris 1969.

本書に關しては、すでに榎教授による詳しい批評と紹介(東洋學報第四三卷第三號)が出されており、今更あらためてつけ加えるべきものもないが、最近ペリオ氏の遺稿がつぎつぎと出版されながら、わが國にはまだ限られた数しか来ておらないようでもあり、羽田教授の「カルムック史料校註」紹介とともに、このすぐれた本書を廣く紹介することも無意味ではないと思われるので、いささか感想を述べて見たいと思う。

今日、マルコ・ポーロの「東方見聞錄」が世界史的意義を持つことは、あまりにも有名な事實である。しかし一般には、それが我が

國をも含めて東アジアと云うこれまであまり知られていなかった世界を當時のヨーロッパ人に紹介したこと、またそれが後にコロンブスのアメリカ大陸發見を誘發させたことなど、云はばその影響のみが強調されている恐れがないわけではない。我々東洋學を學ぶ者としては、まづ「東方見聞錄」に記されている事實そのものの學術的な面を研究の對象として考えて見なければならぬ。

これまでの研究によれば、「東方見聞錄」は普通の單なる旅行記と異つて、ポーロ自身が旅行中に詳しいメモを取り、それにもとづいて記されているため驚くべき程正確な部分が多く、しかも他の史料には見られない事實が記されているため、純粋な史料として學問的にも價値の高いものとされている。

しかしながら、今日そのテキストには種々あつて、各々異同があり、しかもやはり異國人の見聞錄であるため、なかには誤りを犯したものもある。またこれまで疑問のまま未解決に終っている箇所も少くない。著者ペリオ氏は英國のマウル氏と研究を共にしながら、この「東方見聞錄」に出て来る、人名・地名をはじめ重要な項目について、「元朝秘史」・「元史」・ラシッドの「集史」など根本史料はもとより、出來うる限りの關係史料をあつめ、さらにこれまでそれらについて行われた研究をも参照して、あらゆる面から詳細にわたつて研究したものである。そして、その結果を辭典的にアルファベット順に配列した。従つて、本書はマルコ・ポーロ研究には必要不可欠からざるものであり、最も基礎的な研究であると云える。

そればかりでなく、ポーロが誤つた所は、その誤つた理由を明快にしかも甚だ興味深く解明し、又説明の足りない所は他の史料から補つて充分に説明を加えている。なかには詳細のあまり、チンギス

汗の項の如きは、八三頁を費しており、その内容はチンギス汗個人のことばかりでなく、その歴史的背景から後世への影響まで記している。これらを見ると、本書が單なる辭典ではなくして著者の歴史觀を示していることを強く感ずる。

周知のように「東方見聞錄」は、まさしく「世界の記述」と呼ばれるべきもので、西アジア・中央アジアはもとより中國から南海にまでその記述を及ぼしている。これは、ひとえにモンゴル人の世界征覇にもとづくものであるが、このため、異った民族・異った文化がその領内に交錯した。しかもモンゴル人自身は、廣大な支配地について歴史的にも地理的にも、一部を取り扱った「元朝秘史」を除いては、殆んど史料を残していない。むしろ中國人の手になる「元史」とか、ラシッドの著わした「集史」が根本史料として高く評價されなければならない状態である。しかもこれらすらモンゴル大帝國から見れば一部分に過ぎない。したがって、これまでモンゴル大帝國の歴史を全面的に研究することは容易に出来なかつた。しかるに本書を見ると、各項目の説明は、「見聞錄」の領域をはるかに越えて、時間的にも、空間的にもまことに幅の廣いものである。これは著者が「見聞錄」を媒介にして、モンゴル大帝國に關して出来るだけ多くの資料をあつめ、その歴史を解明するための基礎研究としたものであると推察される。

このような計畫は、モンゴル大帝國が廣大だけに微細な史料まで參考にする場合、言語だけでも數カ國に通じなければならず、一個人の到底なしうることはない。しかるに、著者は若くしてヘノイのフランス極東學院の研究員になり、のち中國に移り、さらに有名な中央アジア探險を行い、パリ大學では中央アジアの言語歴史考

古學講座を擔任した經歷の示すとおり、各國語に通じていた。とくに一面では、「中國目錄學の大家」とも評される位、漢文にも通じており、これまでヨーロッパ人のモンゴル史研究の缺點とされていた「元史」をはじめとする漢文史料をいたる所で活用しており、著者にして始めてこの偉業も可能になったと云える。また著者は、すでに「元朝秘史」や「金帳汗國史」の研究を行っており、そのほかこれまでに數多くの研究を發表しているが、本書はある意味ではこれまでの著者の學問の集大成とも云える。

こうして本書は世界的な役割を果したモンゴル大帝國について、これまで世界人であるポーロによって記述された書を、世界的な東洋學者によって注釋されたものと云つても過言ではなからう。さて、前置きが大部長くなつたが、細部について少し紹介して見よう。例えば第二項目の Abaga について。

この名前は本來伯父を意味するものとし、これまでの史料で示されている綴字の相違を示し、漢文では阿不哥・阿不合・阿八合・阿八哈で記されているとしている。人名としてはフラーグの長子で、彼は一二八二年四月に死亡したと説明し、漢文史料で著者の注意をひいたもの七例をあげている。そのうち六例は「元史」からである。なかには同音のものとして阿不合大王をあげ、その都城はバクダッドでなければならぬと結論づけている。いずれにしても *Abaga* と思われるものは「元史」の中にも内容の異つたものが幾つかある。一例をあげればモンゴル人に旭烈兀の長子と順宗の長子がある。ところが順宗の長子となると、阿不哥の外に阿木哥と表記されている例も多くあり、同一人が數通りの文字であらわされることがしばしばある。また逆に *Baïan* は富者の意味から轉じて人名化し

だが、このため同名の者が約三十人もある。これらは、モンゴル人の習俗にもよるが、また一つには音を外國文字でうつすため、あるいはそれを更に誤寫するために生ずる混亂にもとづくものである。そして、これがモンゴル史研究の最大の隘路ともなってきた。とくに「元史」においてはこの混亂が甚しい。と云っても、東アジアに關しては、「元史」以上の根本史料が存在しない以上まずこの混亂を整理する必要がある。この意味では、現在京都大學で刊行中の元史語彙集成（全三卷の豫定）は、かなり明確にし得ると確信する。私もこの事業の一端を受け持つて仕事を進めている間に、「元史」の地名・人名の整理の必要を感じていただけに、本書に接して、その偉大さに驚かされた。しかし本書においても前述した通り、内容的には著者の學風通り、精緻堅實ではあるが、必ずしも充分とは云えないものがあるように思われる。

また本書は遺稿であつて著者はすでに一九四五年世界しており、本書の原稿は一九四〇年頃までに作られたもので、この間我が國においても岩村忍教授の「マルコ・ポーロ」の研究をはじめ、幾つかの研究が行われている。このような點から尙参照すべきものもあると思われる。又細かい點に至つては、五頁下から二行目「元史の引用をMarch（3月）としてあるが、これはFebruary（2月）の間違ひであり、三〇八頁十三行 Nobugasu は Nobuyasu の ミスプリントなどの誤りもある。

もっとも、本來本書のような性質の書物に完璧を望む方が無理である。しかしそのままに放置しておくことは甚だ忍びがたい。今後學問の専門分化が進むにつれて恐らく修正増補すべきものもあらわれてくるだろう。これらは各専門家の協力によって今後ますますよ

り完全なものに近づけて行くことが望ましい。ともあれ、他と異つて甚だ研究困難な分野にあつて、よくその困難を克服してここまで成し遂げた著者の努力に對しては深く敬意を表わすものである。このさい、一日もすみやかに全巻完結されんことを望む。

おわりに臨んで、本紹介はAからCに至る第一分冊を一覽しただけであるため、充分意を盡せなかつた所もあり、あるいはかえつて本書の偉大さを傷つける所もあつたと思われるが、これは筆者の淺學によるものである。

なお、本紹介は京大羽田明教授への寄贈本を借覽しえたことによるもので、同教授に對して厚く感謝する次第である。（萩原淳平）

P. Pelliot, notes critiques d'histoire kalmouke,  
Librairie Adrien-Maisonneuve, Paris, 1960

本書はベリオ遺稿集の第六卷に當り、既刊の各卷と同様に、ベリオの授業の弟子で現在シナ學研究所の主任教授である Louis Hambis 氏の編纂するところである。ハムビス教授の緒言によれば、本書はもとより Baddeley, Russia, Mongolia, China, 2 Vols. 1919 の書評として起稿されたものに、カルムツク史關係の若干の根本的な中國史料——欽定外藩蒙古回部王公表傳、御製準噶爾全部紀略、西域聞見錄、欽定新疆識略などの關係部分——の譯註を加えたもので、一九二〇年から間もないころ、すでに脱稿していたが、推敲の必要があるという理由から、久しく篋底に藏されたままになつてい